
大亜細亜戦争

たくみ226

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大亜細亜戦争

【Nコード】

N9497A

【作者名】

たくみ226

【あらすじ】

この話は、アジアのある国が発射した弾道ミサイルから起こる、日本やその同盟国・周辺国家が混乱をきたし、アジアの全範囲で戦争が起こる最悪のシミュレーション。（必ずプロローグを見てください！！）

長期間交信していない状況でありますので、現代の世界と乖離しているかもしれませんが、作者の気分での話が変わるかもしれませんので、ご了承ください。

アジア戦争 プロローグ・人物紹介（前書き）

日本などの味方国は実名であらわしていますが、念のため、敵国は仮名で表しています！！

アジア戦争 プロローグ・人物紹介

アジア戦争勃発 人物・国名紹介

・参戦国

主人公

日本

首相…熊善郎

官房長官…大沢勝次

防衛庁長官…菅野三郎

海上保安庁長官…川崎健二

警察庁長官…野呂星孝則

国土交通大臣…南田礼二

自衛艦

イージス艦（世界最強の防衛力を保有した艦）

みょうこう（舞鶴）

艦長…吉崎浩二

副長…高坂博通

あたご（舞鶴）

艦長…三村康史

副長…岸山光輝

ちようかい（佐世保）

艦長…中村達治

副長…吉田道義

あしがら（佐世保）

艦長…宮原幸助

副長…穂島範義

きりしま（横須賀）

艦長…藤井茂

副長…吉田和茂

アメリカ

大統領…ジョー・キリュシュ

大韓民国

大統領…河ヒョンソク

オーストラリア

カナダ

朝鮮北部人民共和国
書記長…銀反暗

中華共和国

主席…陳金武

ロジアン連邦

大統領…フェロノサ・セルニコフ

・中立国

国連

事務総長…ジェイムス・ブロックハート

アジア戦争 プロローグ・人物紹介（後書き）

アジア戦争勃発の登場人物はここにすべて表示します。
他の話に出た登場人物も続々こちらだけに掲載します。

対朝鮮編 ミサイル発射 前篇

この第2次世界大戦より大きな戦争は、たったひとつの国の弾道ミサイルによって勃発した。

A月2日 朝鮮北部人民共和国

兵士が大佐に報告をした。

兵士「大佐。発射準備完了しました。」

大佐は確認を取るようにして兵士に言った。

大佐「照準は、ハワイ1発、グアム1発、東京3発、ワシントン3発、ソウル5発。いいな？」

兵士は反射的に応えた。

兵士「はい！問題ありません。」

大佐は、ここで兵士に攻撃開始の命令をした。

大佐「わかった・・・撃て！！」

こうして、5発のテポドン2と、5発のノドン、3発のスカッドが撃たれた。

防衛庁

防衛庁は、アメリカ軍と、10日前にミサイル2発の発射兆候を確認。両国首脳は、すぐに作戦本部を設立し、監視に当たっていたため、ミサイル発射の対応は早かった。そして、この戦争直前の事態に対し首相は、防衛問題に関心があり、過去3回の防衛庁長官の経

験があるため、文民たる自らが指揮するといった。これは、自衛隊の最高指揮官は文民である首相にあるため、政府はこれを許可した。防衛庁オペレーター「首相。ミサイル13発発射を確認！！迎撃命令を！！」

首相「分かった。迎撃開始！！にしても13発とは・・・やけに多いなあ・・・」

オペレーター「みようこう、SM3スタンダードミサイルの発射を許可。」

みようこう通信員「こちら、みようこう。SM3発射許可了解。」

みようこう艦内

通信員「艦長。発射許可下りました。」

艦長「SM3全弾発射！！」

ミサイル員「SM3発射！」

こうして、SM3は、全弾で、東京に向けられた弾道ミサイルに迎撃を実施した。

ミサイル員「迎撃成功1発、2発失敗。敵3発は依然飛翔中。」

艦長「何！？全弾撃ってそれだけか？」

ミサイル員「いえ、後3発が防衛中。」

艦長「SM2も発射スタンバイ！！」

ミサイル員「航空機用のSM2もですか？」

艦長「ああ！！これだけしかSM3で迎撃できないなら、無駄でも可能性があるからSM2で迎撃する意味はある！！」

通信員「本部に連絡します。」

ミサイル員「3発のSM3、2発失敗。迎撃失敗！！ミサイル、3発飛翔中。」

艦長「米艦隊に連絡を！」

通信員「アイ・サー！！（了解）」

通信員「本部。SM2の発射許可を。」

本部オペレーター「許可しない。弾道ミサイルへの成功はほとんど無い。そのため敵航空機迎撃用使用する！」

通信員「了解。」

艦長「このコースだと・・・東京に2発・・・俺たちは何もできないのか？」

副長「艦長。ほかの艦がやってくれます。この間1隻だけが担当してるわけではあるません。」

艦長「そうだな・・・われわれは航空機の有無と弾道ミサイルの監視に専念する！」

総員「アイ・サー」

こうして、弾道ミサイルは他の艦に任せることとなった。

対朝鮮編 ミサイル発射 中篇

あたご（舞鶴所属）

現在は日本海沖を弾道ミサイル監視・迎撃および、韓国が不法占拠している竹島の監視のため日本海沖合いで停泊中

みょうこうと同時間、同じイージス艦のあたごも同じことに遭っていた。

防衛庁オペレーター「あたご、応答せよ！」

通信士「どうぞ。」

防衛庁オペレーター「北からミサイル発射。SM3ミサイル発射命令を出す。」

通信士「了解。艦長、SM3ミサイル発射許可。」

艦長「SM3発射！」

SM3はあたごに積載されている全弾、合計6発を敵ミサイルに撃った。

ミサイル員「艦長。迎撃成功2発、4発失敗。敵3発飛翔中。」

艦長「たった今連絡があった。もしも最後の砦、きりしまが迎撃失敗の場合、日本にミサイルは3分後2発命中する。」

副長「くっそー！！俺達は何もできないのか！？」

イージス艦きりしま（横須賀所属） 現在、防衛庁の指示に基づいて、米軍艦隊とともに、ミサイル迎撃を2交代でしていた。

藤井「まったく、本部のヤロウ・・・こっちは考えてないくせに・・・」

吉田「まあまあ、でもいくら3ヶ月のテロ特措法による補給艦の随行をしてくる帰りにこんなことに遭ったからって航海が終わって陸に戻ることもなしに20日もなんて、本当に人使い荒いなあ・・・」

きりしま通信士「艦長、本部から緊急連絡。たった今朝鮮北部人民共和国からミサイル発射の連絡、日本海の防御は破られるかと・・・迎撃命令です!!!」

藤井「了解。総員に対空戦闘体制を連絡!!!」

吉田「了解。」

艦内アナウンス「総員、緊急連絡。総員、緊急連絡。先ほど、東京の防衛庁本部から、朝鮮北部から国が日本、米国にむけてミサイルを発射したと連絡あり、総員直ちに対空警戒!!!繰り返す、これは訓練じゃない、実戦だ!!!北のミサイルを迎撃して、このきりしま全員で、この太平洋の空からミサイルを打ち落とせ!!!!」

艦内各所の隊員「オオオオオオ!!!!!!!!!!!!」

隊員「藤井艦長。C I C（戦闘指揮室）へどうぞ。」

藤井「私は、ここの艦橋から見ている。吉田。お前がC I Cに行け!!!」

吉田は艦長に敬礼をし、艦長の世話をしている隊員に言った。

吉田「アイ・サー（了解）。では艦長の代わりに私が行く!!!」

隊員「了解、ではお待ちしてます。」

こうして日本に来るミサイルの最終の砦となるイージス艦きりしまが迎撃の任に当たる・・・

対朝鮮編 ミサイル発射 後篇

海上自衛隊イージス護衛艦 きりしま

艦橋・・・

防衛庁オペレーター「SM3ミサイル発射命令を出す。」

通信士「了解。艦長、SM3ミサイル発射許可。」

藤井「SM3発射！」

SM3はきりしまに積載されている全弾、合計6発を敵ミサイルに撃った。

ミサイル員「艦長。迎撃失敗。敵3発飛翔中。」

藤井「何だって！全弾撃って迎撃成功が0発だど！？何していたんだ！？」

吉田「俺達は何もできないのか！？このまま日本はやられるのか？」

防衛庁本部 ミサイル対策本部

熊「東京都内全域に避難命令は？」

大沢「既に発動済みです。」

熊「警察は？自衛隊は？どうなんだ！」

菅野「既にNBC（化学兵器）対処部隊が都内に展開。陸・海・空自輸送部隊は国民輸送をしています。」

野呂星「うちは、機動隊などを高速道路・駅に展開。警察官全員で交通規制中。SATには北の工作員によるテロ警戒のため、ヘリで上空から監視しています。」

南田「国土交通省は、海上保安庁に大方指示済み。各バス・タクシー・航空会社・鉄道会社に強制の国民輸送命令を発令。」

川崎「海上保安庁は、現在船舶の避難を実施。」

熊「了解。J－ALERTのサイレンでの警告は？」

大沢「はい、J－ALERTのサイレン・各地地方公共団体での現在避難命令発動地域は、東京都、神奈川県、千葉県、愛知県、大阪府、兵庫県、沖縄県、それに着上陸進攻が考えられる日本海の沿岸部の各県です。」

熊「よし、各部隊に着弾時連絡体制は？」

大沢「現在、首相および、電波を管轄している総務省からの通達で、部隊すべてに共通の特定無線周波数を割り当てをし、使用させてます。」

熊「しかし、国民の避難地域はかなり広いな・・・」

防衛庁オペレーター1「着弾まで3分。」

防衛庁オペレーター2「東京都、避難率は4割以下。」

熊「いつの情報だ？」

防衛庁オペレーター2「10分前の情報です。」

熊「PAC3（地对空ミサイル。弾道ミサイル対処可能）は？」

防衛庁オペレーター3「・・・（カチカチカチ・・・）全隊防衛中ですが、2発中1発迎撃。1発失敗です。」

熊「死傷者予測は？」

防衛庁オペレーター4「・・・（カチカチカチカチ・・・）核・生物兵器で約1000名以上、通常弾頭で約50名から、多いところは数百人です。」

熊「記者会見の用意を！！！」

内閣官房職員「分かりました。20分後に・・・。」

防衛庁オペレーター1「着弾！！着弾です。・・・着弾確認。全てのイージス艦から報告を待ちます・・・ミサイルの機影、消滅。^{ロスト}」

1分後・・・

防衛庁オペレーター1「全イージス艦および、警察から連絡。着弾

を確認したとのこと……」
熊「何てこった……国内に着弾か……」

対朝鮮編 ミサイル着弾

防衛庁本部 総合作戦指令室

（日本本土へのミサイル着弾を確認）

熊首相「着弾地域はどこだ？」

防衛庁オペレーター1「日本の情報収集衛星からだど・・・（カチカチ・・・）東京都豊島区目白周辺です。」

熊「詳細な着弾場所は？」

防衛庁オペレーター2「・・・（カチカチカチカチ）・・・小・中学校および幼稚園らしき教育施設でしょう。しかし、たったあれだけのミサイルとは考えられません。第2波、第3波は必ずあります。」

熊「自衛隊に朝鮮北部人民共和国軍の兵器は、防空識別圏内侵入後に攻撃許可！これより朝鮮北部人民共和国に宣戦布告する！！」

大沢「・・・分かった。自衛隊に通達を・・・」

菅野「自衛隊に通達。これより無線で総員に通達。」

菅野（自衛隊無線で）「自衛隊隊員の諸君。防衛庁長官の菅野だ。

総員に悲しい報せが入った。現在、朝鮮北部人民共和国からのミサイルがわが国の東京に通常弾頭で着弾した。死傷者多数である。これより、朝鮮北部人民共和国に宣戦布告をする！これで諸君に朝鮮北部人民共和国軍に対し、攻撃許可を出す。」

熊「・・・自衛隊に攻撃許可は出した。東京の避難率は？」
防衛庁オペレーター3「・・・（カチカチカチ・・・）先ほどの攻撃でJRは輸送停止。ほかも一時ストップです。現在は5割強から6割弱。」

熊「周辺住民は？」

防衛庁オペレーター4「・・・（カチカチカチ・・・）死傷者不明。以外情報なし。」

熊「・・・報道は？」

防衛庁オペレーター4「・・・（カチカチカチ・・・）うち（防衛庁）と官邸関係者で避難報道だけにさせてます。しかし、一部ではお天気カメラで爆心地の判明をしてるようです。」

内閣官房職員「官邸記者クラブの記者が会見場に来ました。どうされます？」

熊「・・・分かった。会見も状況を把握してから。」

内閣官房職員「首相、宣戦布告を報道に・・・」

熊「分かった、これから会見する。会見場まで。」

内閣官房職員「分かりました。では・・・」

こうして、熊首相は自らの口で開戦・宣戦布告の声明を発表することにした。

対朝鮮編 ミサイル着弾 総理大臣緊急記者会見

首相特別記者会見

熊首相の発言

— — — — —
— — — — —
— — — — —

本日、11時17分に、朝鮮北部人民共和国からミサイルらしき飛翔体が1発が着弾しました。着弾場所は、東京都豊島区周辺です。

ミサイルの弾頭は核爆発を確認していないことから、おそらく通常弾頭ですが、生物化学兵器の可能性もあることから、国民に対して現場周辺直径20キロの範囲内は立ち入り禁止命令を発令しました。

現場からの報告では、着弾地付近で亡くなられた方は複数いらっしゃる模様です。また、着弾地が小さな幼稚園であることから、朝鮮北部人民共和国のミサイルの発射は成功だが、おそらく、目標である永田町や、防衛庁への着弾は失敗であることから、これから、日本の主要都市、および、工業地帯に対して攻撃が激化する恐れがありますので、ご注意ください。

この攻撃に伴い、11時18分に、日本国として初めて、日本の歴史では61年ぶりに戦争を行います。

宣戦布告を国際社会の国々に、朝鮮北部人民共和国に対して宣戦布告を通達しました。

これに伴い、自衛隊全部隊に対して朝鮮北部人民共和国軍に攻撃許可を出しました。

この行動を円滑に行うため、自衛隊は日本の正式な軍隊として初めて国会を開き、自衛隊の行動を首相命令で自由に行う特別措置法を

また、アメリカ合衆国も、同時に日米安全保障条約に基づき、またアメリカ本国にミサイル着弾の可能性があることから、朝鮮北部人民共和国に宣戦布告をしたと連絡がありました。

[illegible]

対中国編 北情報入手・行動準備

中華共和国 首都…京北

主席の陳金武は、極秘情報機関から、北朝鮮がミサイルを実際に発射し、宣戦布告を行うという正確な情報源からの情報を入手したため、北朝鮮有事発生の際の行動確認のため、陸・海・空軍関係者と話していた。

（このシリーズは中国人中心なので、特別な事がない限りここに出てくる人は全員中国語をしゃべっていると解釈してください。）

陳「瀋陽軍区司令員。瀋陽軍区に攻撃待機要請を出せ。」

瀋陽軍区司令員「はい、でもなぜでしょうか？」

陳「情報機関からの情報で、北がミサイルを発射するらしい。それも、核弾頭搭載の物を威嚇でなしに戦闘で・・・だ。」

瀋陽軍区司令員「はい、では、命令が出てから北朝鮮を攻めるんですか？」

陳「そうだ。私が直接出すから、それから来たに国連軍侵攻阻止の目的で義勇軍として侵攻せよ。そして、朝鮮半島を占領して、今の崩壊寸前の北朝鮮の国家を潰して、今まで以上の我々の息のかかった国家の建設をするのだ。」

瀋陽軍区司令員「はい、分かりました。」

陳「続いて、東海艦隊司令員と北海艦隊司令員。」

東海艦隊司令員と北海艦隊司令員「はい。」

陳「韓国・アメリカ・日本の牽制をせよ。場合によっては攻撃も行え。宣戦布告を出せば、彼らの船を攻撃してよい。」

東海艦隊司令員と北海艦隊司令員「はい。」

陳「それから、南京軍区司令員。」

南京軍区司令員「はい。」

陳「南京軍区には、台湾侵攻の準備をせよ。朝鮮がミサイルを発射した地点で、こちらはミサイル発射準備をし、国連軍が手出しすれば威嚇で無弾頭のミサイルを台湾に発射せよ。」

南京軍区司令員「分かりました。」

陳「諸君の健闘を祈る。以上だ。」

対中国編 北情報入手・行動準備（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

久しぶりの更新をしました。この話をお待ちしていた方々に遅くなって本当にごめんなさい。この話は今後は月1、2回ペースの更新となると思います。

参照…ウィキペディア 中国

対中国編 国家主席の悩み

中国主席の陳は悩んでいた。

彼は、中国の国家主席^{トップ}の中では信じられない思想の持ち主だった。これは、陳が一度も言っていなかったことだったが、彼は、親が日本に長期間住んだ経験があり、また、母方の祖母が日本人で、そんな家庭環境を受けていたので、中国の政治化の中では意外だが、隠れ親日派で、日本との国交回復を望んでいた人だった。

「はあーっ。・・・あの銀^{ヤロウ}、日本と戦うなんてふざけてるじゃないか。アメリカと戦わないといけないのは明白なのに・・・こっちは社会主義と自由主義の衝動地帯がなくなるから、おかげで介入しないといけなくなってくるじゃないか・・・。それに、韓国やアメリカ・日本にミサイルぶち込むなんて情報をCIAが持っていたから、国境を接するわが国がこんな事になったじゃないか。」

そう、銀総書記が朝鮮中央通信発で、『わが国は、日帝（日本）と、アメリカ帝国の経済攻撃に宣戦布告し、わが国の平和と独立・それに安全の確保ために立ち上がることにする用意がある。』

と、ピョンヤンから言い、北朝鮮軍を朝鮮半島南部、（早いところが韓国国内）に侵攻させようとしていた。このころは、まだ北はミサイルを撃つ前だったが、北朝鮮の軍部のものと思われる無線交信が頻繁になっていた。

そして、これを『象のオリ』などの通信傍受施設で知ったアメリカが、北朝鮮と国境を接する中国とロシアにアメリカ人を置き、その事を中国公安がつかんでいた。しかし、場所が分らないために、探したいのは山々だが、中国国内は内政問題で武力衝突がいつ起きてもおかしくない状況のところもある。

それに、最近は、北朝鮮の国境警備隊までが国境を飛び出して強盗などを犯しているとも彼は聞いた。そのため、その対処のために国境警備隊を増員しなければならないので、彼は余計に頭を痛めた。そこに、中国人民解放軍の人間が、主席室にノックもせずに入ってきた。

人民解放軍兵士「主席同士！緊急です。」

陳は、一軍人、それも兵が、最高司令官である国家主席の部屋に上がるのに、ノックをしないなんて信じられず怒りたかったのだが、彼の『緊急』の言葉を聞き、それた後回しにしようと思った。そして、彼の話を聞いた。

陳「何だね？」

そのことばを聞き、息を切らし、ゼエゼエ言っている彼は、激しい呼吸の中で声を出して、陳に近づきながら話した。

人民解放軍兵士「主席同士、朝鮮が戦争を仕掛けてきました。アメリカと日本・韓国にミサイル発射。アメリカはすぐに宣戦布告を北朝鮮に言うでしょうから、戦争が始まります。」

陳は「来るべきものが来てしまったか・・・」と、落胆した様子で言い、伝令役の人民解放軍兵士に、「朝鮮国境との間に陸軍を第23集団軍（司令部、黒竜江省ハルビン）4個旅団1個師団にフル編成で配備。空軍の飛行を増やしてアメリカへ朝鮮戦争再開へのけん制をかけても良い。だが、まだ武器の使用は止める。アメリカや朝鮮と戦争すれば厄介だ。もしもアメリカが戦闘しそうになったら逃げてもいい。とにかく今は彼らと戦争したくは無い。」といった。

陳は伝令の兵士が部屋を出て行くと、電話で「京北コウキョウのアメリカ大使館に連絡してアメリカ大使と武官を呼べ。」と電話で外交部の人間に言った。

外交部職員「はい！ただいま。」

対中国編 アメリカ大使と会談

1時間後・・・

『コンコン・・・』

陳「どうぞ。」

中国政府職員「外交部とアメリカ大使館からです。」

主席室には、外交局のトップ数人と、在中国アメリカ大使館の大使と武官、それに数人の外交官がおり、陳主席は専用の椅子で座っていた。

室内は緊迫した空気の中、それを破って声を発したのは、この場所にアメリカ大使と武官を呼びつけた国家主席の陳だった。

陳「早速だが、”戦争”の事で聞きたいことがある。なぜ朝鮮と国境を面しているわが国に通告もなしに戦争を？」

陳の怒りの質問を、アメリカ大使が答えた。

駐中国アメリカ大使「すいません。我々のところへは既に情報は入っていたのですが、中国語に翻訳する作業がなにぶん時間がかかりまして・・・」

陳は、それを言ったアメリカ大使をじっと見ていた。そして、
「そうですか…。なら英語で文章を頂ければ良かったのに。我々は

英語を読むことは容易いですよ。今だってそう、私はこうやって英語をしゃべってるんですから……。まあいいでしょう。我々は彼らに支援はしません。かといって、あなたたちの支援をするわけでもない。『中立』を表明します。これは、国際社会に向けて言うことですし。」

陳を始め、中国政府関係者は全員英語を使って彼らと話していたのだ。

駐中国アメリカ大使「そうですか……。ご協力だけでなく残念です。それと、実はこちらの方が本題なんですが、近いうちに、うち（アメリカ）に来てもらえませんか？この後のことを考えていきたいので。一応、日本とロシアについては参加を表明してくれてるんですが、肝心の中国がいない事には、戦後の話は出来ません。」

このような調子で、中国は北朝鮮難民が朝鮮族自治州で溢れかえり、治安が悪くなっていることなどをあげ、周辺国に迷惑や被害のないようにして欲しいと言った。

く終了後く

陳はため息をついて秘書に言った。

「今から党中央政治局常務委員を全員集めろ！！この戦争についての今後の策を会議する。それから終了後に報道陣向けの記者会見を実施し、この戦争への『中立』を私の口から表明する。」

秘書は国家の元首である『国家主席』が自ら発表することに強い驚きを持ったが、それを顔に出さずに言った。

「分かりました。今から用意させます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9497a/>

大亜細亜戦争

2010年10月11日04時06分発行